

『伊勢物語』六十段「花橋」小論

——女子大学の教室から、注釈のジェンダーバイアスを考える——

大 津 直 子

はじめに

コロナ禍に入ってから二年、大学においても授業の方法や内容について様々な変更を余儀なくされてきた。平時では受講生たちが作品を選択しグループ発表をする「古典文学入門」も、資料調査やレジュメ作成時の接触を最小限にすべく、個人発表へと切り替えざるを得なかった。作品研究の負担を減らすために、現在は対象を『伊勢物語』に定めて輪読を行っている。

『伊勢物語』は、在原業平と目される昔男の恋を中心に展開する、平安初期の歌物語である。業平の実作と見られる歌によつて成る章段がある一方で、他の歌集に見られる古歌や他の

人物の詠歌を取り込んだ章段も散見され、現在は段階的な増補を経て成立したと理解されている。小稿で取り上げるのは六十段「花橋」である。

むかし、男ありけり。宮仕へいそがしく、心もまめならざりけるほどの家刀自、まめに思はむといふ人につきて、人の国へいにけり。この男、宇佐の使にていきけるに、ある国の祇承の官人の妻にてなむあると聞きて、「女あるじにかはらけとらせよ。さらずは飲まじ」といひければ、かはらけとりていだしたりけるに、さかななりける橘をとりて、

さつき待つ花たちはなの香をかげばむかしの人の袖の

香ぞする

といひけるにぞ思ひいでて、尼になりて山に入りてぞありける。

(二六二―二六三頁)

本章段に登場するのは、「男」(以下、「昔男」と「家刀自」、その再婚相手の「官人」である。「家刀自」は現在、家事をつかさどる婦人、主婦と訳される。昔男の多忙と不実のせいで、両者の仲が途絶えてしまうと、彼女は今度こそ誠意のある夫を持ちたいと思い、「大切にしよう」と言ってくれた「官人」について地方へ下った。昔男は勅使となり、宇佐へと向かう中途の国にかつての妻(以下、〈橘の女〉で統一する)が暮らしていることを知る。接待の場に「女あるじ」として呼び出し再会を果たした後に〈橘の女〉は尼になった、というのがあらずじである。昔男の詠として末尾に配された詠み人知らずの古今集歌「五月待つ花橘の香を嗅げば昔の人の袖の香ぞする」は、曾て睦まじい仲であった相手に昔を思い起させるきっかけとして機能している。

さて、問題は「といひけるにぞ思ひいでて、尼になりて山に入りてぞありける」という最後の一文である。「思ひいでて」「尼になりて」という箇所について手近の注釈書の解釈を列記

してみる。

①『日本古典文学大系』(岩波書店)：自分の過去の行を恥しいと。一説、もとの夫であることを女が思い出して。過去の行を悔いたのである。

②『日本古典文学全集』(小学館)：女は心うつ歌を詠む男を目の前にして、昔のこと、わが身の軽薄さを思い起こして発心する。

③『新潮日本古典集成』(新潮社)：過去の行為を思い出して。「発心して(尼になる)」と解する説もある。

④『完訳 日本の古典』(小学館)：女は身の軽薄さを恥じて発心して尼になったことをいう。

⑤『新日本古典文学大系』(岩波書店)：もとの夫の変らぬ情愛を思い起し、自分の軽卒を悔い、これまでの生活を清算しようとした。山寺に籠って余生を過ごした。【場面評】一〇九番歌は人口に膾炙した古歌を男の詠作として構成されている。公務繁忙のため家を顧みることが疎かになった男と、家を守り夫の情愛によりすがる妻とが余儀なく別れて、それぞれの人生を生きた後のいたわしい再会。男は意趣あつて一〇九番歌を詠みかけたのではあるまい。

なつかしさのあまりの行為が女を出家へと導いたのだが、その女の心内・人柄、また男と別れて以来のこれまでの生活は平安であったのかどうか等々、あれこれと読者は想像を誘発されるだろう。

⑥『新編 日本古典文学全集』（小学館）…女はこの秀歌を詠む男を目の前にして、昔のこと、わが身の軽薄さを思い起こして発心する。

【現代語訳】と詠んだのを聞いて、その女は、この優雅な貴人は昔の夫だったと思ひ出し、わが身を恥じ、尼になって山に籠って暮したのだった。

諸注は一樣に、〈橘の女〉が自分の「過去の行を恥しい」と思い、「わが身の軽薄さ」「身の軽薄さ」「自分の軽卒」を悔いて尼になった、と解している。はたと考え込んでしまった。果たして彼女は、出家せずには生きることが出来ないほど大きな過ちを犯したのだろうか。稿者自身は学生時代から現在に至るまで、従来のこうした解釈を違和感なく受容してきた。ところが女子大学の教壇に立ってみると、どうにも語りにくさがこみあげてくる。ここに女性の自己決定、主体的な判断を浅知恵、軽卒と決めつけるバイアスが働いてはいまいか。「古典文学入門」

の時間に問いかけたところ、受講生たちからは「言われてみると違和感がある」「〈橘の女〉に対してあまりに辛辣だ」という回答が返ってきた。

注釈のジェンダーバイアス——この題目は、平成二十七年（二〇一五）度に開催された中古文学会春季大会におけるシンポジウム「女性文学としての中古文学」で扱ったテーマ「注釈のジェンダーバイアスを問う」を借用したものである。^{〔1〕}稿者はいま一つのテーマのパネリストであったこともあり、正直なところあの折にはピンと来ないままに拝聴していた。しかしながら七年の歳月が経過し、社会も少しずつ変化してきた。女子学生たちと古典を読む近年、ふと生じる違和感はいや増すばかりである。ジェンダーやフェミニズムに関する運動や研究には膨大な蓄積があり、また丁寧に繊細な論じ方が求められることは承知している。^{〔2〕}小稿はあくまで門外漢の立場（ともすれば「漢」という言い方も偏りがあるうか）から、秀歌を詠む風雅な男とそれを捨てた浅はかな女という構図が固着化してしまっている『伊勢物語』六十段について考察してみたい。

一、昔男のふるまいは本当に「優雅」だったか

既述の通り、注釈史上、かつての妻に懐旧の情を詠み込んだ歌を呼びかける男のふるまいは様に礼賛されている。昔男の詠ととらえるべきか、古歌として口遊んだと見るべきかについては揺れがあるものの「優雅」と評価されている点は一致している。こうした傾向は『愚見抄』以来、近世以前よりの主要な見方であるという⁽³⁾。

さて、この歌は本当に「変らぬ情愛」から詠まれた歌なのだろうか。昔男は、自らの正体を明かさずに「女あるじ」として〈橘の女〉を呼び出し、接待をさせた。確かに、妻が自ら客人をもてなすケースは他にも存在する。四十四段「馬のはなむけ」である。

むかし、あがたへゆく人に、馬のはなむけせむとて、呼
びて、うとき人にしあらざりければ、家刀自さかづきささ
せて、女のさうぞくかづけむとす。あるじの男、歌よみて
裳の腰にゆひつけさす。

いでてゆく君がためにとぬぎつればわれさへもなくな
りぬべきかな

この歌は、あるがなかにももしろければ、心とどめてよま
ず、腹にあちはひて。

(一五二頁)

作中で「家刀自」と呼ばれるのは、右の女性と〈橘の女〉だ
けであり、注目される章段である⁽⁴⁾。ただし、傍線部の通り「あ
がたへゆく人」と「家刀自」とが親しい間柄でありそれゆえに
媒酌をしたという説明がある。今問題とする六十段はどうだろ
うか。〈橘の女〉の再婚相手は「ある国の祇承の官人」であり、
昔男とは面識がない。「祇承」の初期の用例は、つつしんでも
てなし仕えることを意味する動詞として散見される⁽⁵⁾。例えば
『常陸国風土記』筑波の郡である。

更に、筑波の岳に登りまして、亦容止を請ひたまひき。こ
の時、筑波の神答へて曰ししく、「今夜は新粟嘗すれども、
敢へて尊旨に奉らずはあらじ」とまをしき。爰に飲食
を設けて、敬び拝み祇承へまつりき。

(「筑波の郡」三六一頁)

御祖の尊が富士山を訪れ一夜の宿を求めるのだが、富士山は
新嘗祭で多忙を極めるためにこれを拒んでしまう。次に筑波山
をたずねたところ、同じ事情を抱える筑波山は心を籠めて歓待
したという。所謂異人歓待譚にあたる右のくだりにおいては、

御祖の尊に奉仕する筑波山のふるまいが「祇み承」ふと描かれている。また、『大和物語』に小異歌が見えることで知られる『万葉集』三八〇七番歌にも注目したい。

安積山 影さへ見ゆる 山の井の 浅き心を 我が思はな
く

右の歌、伝へて云はく、葛城王、陸奥国に遣はされける時に、国司の祇承、緩怠なること異甚だし。ここに王の意悦びずして、怒りの色面に顕れぬ。飲饌を設けたれど、首へて宴樂せず。ここに前の采女あり、風流びたる娘子なり。左手に觴を捧げ、右手に水を持ち、王の膝を撃ちて、この歌を詠む。すなはち王の意解け悦びて、楽飲すること終日なり、といふ。

〔卷一六〕四一—四二—四三頁

左注によると、葛城王が陸奥国を訪れた時、国司の接待に非礼があった。腹を立てた葛城王が宴席を拒むと、宮廷の作法を知悉した「前の采女」がこの歌を詠み怒りを鎮めたという。これらの用例から「祇承」が特定の官職ではなく役割を指していたと知られる。重要なのは、客人と「祇承」を担当する者との

絶対的な権力勾配である。

昔男は「宇佐の使」として再来し、かつての「家刀自」を「女あるじ」と呼び接待を命じた。宇佐の使は奈良時代中期以来即位や国家の大事、天変地異などのある場合に使わされた勅使である。古語「あるじ」には馳走、饗応の意味もあり、男性が女性にそれを求めることは暗に夜伽を命じる意にも通じたとだろう。〈橘の女〉は、「さつき待つ」の歌を耳にするまで勅使が昔男だと気付かなかったのだから、「女あるじ」にはかけとらせよ。さらずは飲まじ」という言葉は、そうした要求とも受け取られる暴力性を孕むものではなかったか。前掲の注釈の通り、昔男の言動は〈橘の女〉に向けたなつかしさや未練、あるいはそれゆえに「一言恨み言をいつてやりたい」気持ちと解釈されてきた。しかしながら、そのふるまいからは自分を捨てて格下の男について行った女への陰湿な執着心を読み取るべきではなからうか。

二、〈橘の女〉の行動は「輕薄」だったか

ここで今一度、〈橘の女〉と昔男とが別離した理由に立ち返りたい。物語はその契機を男の「宮仕へいそがしく、心もまめ

ならざりける」態度に求めている。〈橘の女〉は「官人」の「まめに思はむ」という思いに応えて、再婚をした。当時は制度上も慣習上も、一定期間をもって女性側から婚姻を解消することも可能であったことを思えば、〈橘の女〉の行動には筋が通っている。⁽⁸⁾つまり、関係解消の理由は二つ、一つは昔男の「宮仕へ」の多忙さ、今一つは「まめ」さを軽んじる男性と重んじる女性という価値観の違いである。

この物語において「宮仕へ」が恋や愛の妨げとして描かれていることは先行研究において夙に指摘されるところであり、贅言を要しないようにも思われるが、今一度八例存在する「宮仕へ」の用例を検討することとしたい。

一例目は十九段「天雲のよそ」である。

むかし、男、宮仕へしける女の方に、御達なりける人をあひしりたりける、ほどもなく離れにけり。同じ所なれば、女の目には見ゆるものから、男は、あるものかとも思ひたらず。
(一二〇～一二二頁)

「宮仕へしける女」は女御更衣を指すとされ（新編日本古典文学全集頭注）、昔男の相手はそこに出仕している女性である。二人の関係が途絶えがちになった後も「同じ所なれば」女性側

が昔男の姿をたびたび見かけることがあり、未練が掻き立てられているという点に留意したい。二例目は次段の二十段「楓のみぢ」にある。

むかし、男、大和にある女を見て、よばひてあひにけり。さてほどへて、宮仕へする人なりければ、かへり来る道に、三月ばかりに、かへでののみぢのいとおもしろきを折りて、女のもとに、道よりいひやる。

君がため手折れる枝は春ながらかくこそ秋のみぢしにけれ
とてやりたりければ、返りごとは京に來着きてなむもて來たりける。

いつのまにうつろふ色のつきぬらむ君が里には春なからし
(一二二～一二三頁)

右で描かれるのは「大和にある女」との恋である。「大和」は「奈良辺り」（新編日本古典文学全集頭注）とされ、帰参する道中で送った手紙の返歌が京に着いてから届くという。時間の経過は楓の若葉の色の変化へと装えられ、細やかなやりとりによって距離という障壁を乗り越えようとする、前章段と対照的な関係性が紡がれている。

三例目は二十四段「梓弓」である。

むかし、男、かたゐなかにすみけり。男、宮仕へしにとて、別れ惜しみてゆきにけるまに、三年來ざりければ、待ちわびたりけるに、いとねむごろにいひける人に、「今宵あはむ」とちぎりたりけるに、この男來たりけり。

(一三八―一三九頁)

右は、「かたゐなか」に住んで居た昔男が「宮仕へ」を決意し、戻つてこなくなつてしまう状況から語り起こされる。情愛が消えたわけではないものの、三年に亘り関係が絶たれている点は六十段と共通しており、関連する章段として論じられることが多い。⁽¹⁰⁾「かたゐなか」の場所は特定できないものの、⁽¹¹⁾京との往來が困難な京外の地と見ることが出来る。四例目は今問題とする六十段なので、五例目の七十八段「山科の宮」を見てみよう。藤原常行が「山科の禪師の親王」の御殿に参上した折、「年ごろよそには仕うまつれど、近くはいまだ仕うまつらず。こよひはここにさぶらはむ」と述べた。

さらに、かの大將、いでてたばかりたまふやう、「宮仕へのはじめに、ただなほやはあるべき。(中略)」とのたまひて、
(一八〇頁)

右は山科を「宮」と呼ぶ点に面白味を見出すべき用例である。六例目は、長岡に暮らす「宮」である母が「宮仕へ」をする昔男に手紙を寄越す八十四段「さらぬ別れ」にある。

むかし、男ありけり。身はいやしながら、母なむ宮なりける。その母、長岡といふ所にすみたまひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうです。

(一八七―一八八頁)

傍線部「子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうです。」とあるように、やはり母のことを気に懸けつつも「宮仕へ」ゆえになかなか訪れることが出来ないという恋人や夫婦とは異なる関係性という点で類似するのが七例目の次段「目離れせぬ雪」である。

むかし、男ありけり。わらはより仕うまつりける君、御ぐしおろしたまうてけり。正月にはかならずまうでけり。おはやけの宮仕へしければ、つねにはえまうです。されど、もとの心うしなはでまうでけるになむありける。

(一八八―一八九頁)

右は所謂惟喬親王章段である。親王に「わらは」の時から仕え、新年の算賀には必ず参上していたにも関わらず、「宮仕へ」

のために近侍することが叶わない。「おほやけの宮仕へ」という表現からは、朝廷への奉公に対する主君への奉公という対比関係が読み取れる。昔男はそのせめぎ合いに苦悩するのである。最後の用例八例目は続く八十六段「おのがさまさま」にある。

むかし、いと若き男、若き女をあひいへりけり。おの親ありければ、つつみていひさしてやみにけり。年ごろ経て、女のもとに、なほ心ざし果たさむと思ひけむ、男、歌をよみてやれりけり。

いままでに忘れぬ人は世にもあらじおのがさまさま年の経ぬれば

とてやみにけり。男も女も、あひはなれぬ宮仕へになむいでにける。
(二八九～一九〇頁)

若い男女が互いに好意を抱いていたが、親へ打ち明けることが出来ず、思いを遂げぬまま終わってしまった。しかし、「あひはなれぬ宮仕へ」をしていた者同士であったために、男の方から「いままでに」の歌を贈った、という話である。同じ場所に仕えるがゆえに未練が残り、音信があるという点は、一例目の十九段「天雲のよそ」と類似している。

まとめると、以下のような傾向がある。「宮仕へ」する者同

士は何かと互いの近況が漏れ伝わり未練も残る。他方、片方が「宮仕へ」をしている場合は、恋人夫婦関係に限らず深い情愛があっても訪れが途絶えがちになってしまう。また、後者の場合、「大和」「かたみなか」「長岡」といったように、待つ側の人物の京外を思わせる居住地が明示されることも多い。

ただし、『伊勢物語』に描かれる「京」は平安京を指すとは限らず¹²⁾、したがって「宮仕へ」先についてもその実態がつかみにくい。参照したのは八十七段「布引の滝」である。

むかし、男、津の国、菟原の郡、蘆屋の里にしろよしとて、いきてすみけり。昔の歌に、

蘆の屋の灘のしほ焼きいとまなみつげの小櫛もささず来にけり

とよみけるぞ、この里をよみける。ここをなむ蘆屋の灘とはいひける。この男、なま宮づかへしければ、それをたよりにて、衛府の佐ども集り来にけり。(中略) かへり来る道とほくて、うせにし宮内卿もちよしが家の前来るに、日暮れぬ。

(一九〇～一九二頁)

摂津国に領有する土地を持ち、そこに住んで居た昔男が「宮仕へ」を思い立つ。やはりここでも「かへり来る道」が遠く、

往來にあたつては日が暮れてしまふという。注目したいのは「なま宮つかへ」という表現である。新編日本古典文学全集の現代語訳は「さしたる地位でもない宮廷勤め」と訳しているが、これは再考の余地がある。「さしたる地位でもない」のであれば、「衛府の佐ども」が男を「たより」にして集まつてくるのは不自然だからだ。接頭語「なま」はまだ十分でないさま、熟していないさまを表わすのであり、「なま上達部」のように人に関わる場合はその地位に就任したての人間を指す。したがって「なま宮つかへ」も「宮仕へ」を始めて間もないことを意味していると考えられる。だから、同じように衛府に仕える男たちがつてを頼つて集まつてきたのである。

遷都を繰り返した頃合い、京外に暮らす者が思い立つ「宮仕へ」とは、言うなれば新天地での新興産業のようなものであったのではないか。「宮仕へしければ」という因果関係が繰り返されるのは、社会の大きな変化に伴い、旧來の親しい関係性が途絶えがちであつた当時の状況を反映したものと考えられる。⁽¹³⁾分断されやすい人間関係を永続させる鍵は、いかに「まめ」でいられるか、すなわち実直なふるまいにかかつていたはずである。昔男はそれを怠つてしまった。今一度六十段原文に立ち

返つてみると、実のところ《橘の女》の行動を批判する表現は一切見られない。物語は「宮仕へ」によって隔てられた男女に起きた事の顛末を語っているに過ぎないのである。

三、六十段の関連章段とその源泉

六十段を解釈する上では従来、類似の筋書きを持つ前掲二十四段「梓弓」と、六十二段「こけるから」との関連性が重視されてきた。以下、全文を引く。

むかし、年ごろ訪れざりける女、心かしこくやあらざりけむ、はかなき人の言につきて、人の国なりける人につかはれて、もと見し人の前にいで来て、もの食はせなどしけり。夜さり、「このありつる人たまへ」とあるじにいひければ、おこせたりけり。男、「われをばしらずや」とて、

いにしへのにはひはいづら桜花こけるからともなりにけるかな

といふを、いとはづかしと思ひて、いらへもせでゐたるを、「などいらへもせぬ」といへば、「涙のこぼるるに目も見えず、ものもいはれず」といふ。

これやこのわれにあふみをのがれつつ年月経れどまさ

りがほなき

といひて、衣ぬぎてとらせけれど、捨てて逃げにけり。いづちいぬらむともしらず。

(一六三—一六四頁)

確かに、男の訪れない間に自己の判断によって「人の国」に下っていること、給仕として呼び出され昔男に歌を詠みかけられること、その後出奔すること等、「女」の身の上に起こったことと結末に類似点が多い。ただし右では「心かしこ」からざる「女」が「はかなき人の言」に騙されて地方に下っており、昔男との邂逅の折には女自身も「いとほづかし」と悔いている。ところが〈橘の女〉の場合、昔男との離縁の原因が女の未熟さにあるとは描かれておらず、「さつき待つ」の歌を詠み掛けられた折の心中も語られない。この違いは見過ごしてはならないように思われる。

また、六十段の源泉として『蒙求』、『漢書』、『史記』などに見える朱買臣の故事が指摘されてきた。糸井久氏は、①朱買臣との貧窮の暮らし、②自分から夫を見棄てての離別、③新しい夫との再婚、④高官となった朱買臣との再会、⑤自死の五点を挙げ、六十段の結末を「女の主体的な判断・選択が、以後の人生を没落、破滅といった不幸な方向に決定づけ」たと指

摘する。確かに、『蒙求』「買妻恥醜」における朱買臣は慈悲深く自らの短慮を悔いる愚かな妻とは対照的な人物であり、これを前提とした場合、昔男は優れた夫、〈橘の女〉はそれに気づけなかった浅慮な妻ということになる。ただし、この話は焦点を朱買臣と妻とのどちらに置くかによって印象が変わる。各出典間の差異を精査した後藤幸良氏によれば、『漢書』、『史記』における朱買臣は、自分を見下し傷つけた相手に対して深い恨みを抱いて報復する人物であり、こちらをふまえると昔男にも〈橘の女〉に対する「加害者の一面」を見出すことが出来ると言う。確かに、朱買臣ほどの高官ではなくとも昔男は「官仕へ」に打ち込み勅使となって再来するわけで、〈橘の女〉を夫の出世を待てなかった妻と位置づけることは可能であろう。『伊勢物語』の成立に様々な漢文学の影響があることは論を俟たないから、朱買臣の故事が六十段の源泉となった可能性は高い。しかしながら、やはり大切なのは朱買臣伝との差異である。〈橘の女〉は「まめ」なる夫を求めて関係を解消したのであり、昔男の体たらくを嘆いて関係を断つたわけではない。とりわけ、短い章段に「まめ」という表現が二度繰り返されることは注目すべきではなからうか。

四、「家刀自」の矜持

あわせて重要なのは〈橘の女〉に与えられた「家刀自」という属性である。女性に対する尊称であった「刀自」という言葉は古く、その派生語として「家刀自」、「里刀自」、「寺刀自」などがある。『時代別国語大辞典 上代編』(三省堂)や『日本国語大辞典』(ジャパンナレッジ版 小学館)が「刀自」の初期の用例として挙げるのが次の允恭紀である。

時に鬬鶏国造、傍の径より行く。馬に乗りて籬に莅み、皇后に謂りて、嘲りて曰く、「能く園を作るか、汝や」といふ。〈汝、此には那鼻苔と云ふ。〉且曰く、「圧乞、戸母、其の蘭一茎」といふ。〈圧乞、此には異提と云ふ。戸母、此には親自と云ふ。〉

(新編日本古典文学全集 二一〇七頁)

允恭天皇二年二月、鬬鶏(奈良県の旧地名)の国造が、皇后を「戸母(刀自)」と勘違いし、無礼を働く。当時皇后は実母の家に住んで居た。通りかかった国造は、騎乗したまま皇后に向けてお前は園を作るのが上手いか、その野蒜をひと茎くれ、と語りかける。興味深いのは「戸母(刀自)」という属性と野蒜の

育てる能力との関わりである。「刀自」の語源は「戸(ト)主(ヌシ)」とする説が有力視されている。「戸」は単なる家族ではなく入口(門・戸)あるいは場所(処)を意味する。「一戸の出入を支配したところから、一戸を所有支配するヌシの意が原義」であり、そこから戸口を守る者、即ち一家の主婦権を持つ母の尊称という意味が生じた。彼女たちに求められるのは一括りのまとまり、空間なり共同体なりを管理、維持する能力であった。だから皇后を「戸母(刀自)」と勘違いした国造は、「蘭」の園の管理、統率者としての能力の有無をからかったのである。

「家刀自」の史料上の初見は八世紀前半の碑文である。「刀自」の歴史的変遷を検証した義江明子氏は、初期の「家刀自」の率いる「家」に女性の夫は含まれておらず、夫を排除した女系のまとまりであったこと①、次第に夫と構成する「家」のペアの経営主体としての「家刀自」が登場すること②、最終的に夫の「家」の家事をつかさどる主婦となつてゆくこと③を指摘し、三段階の変化が起きたと述べる。また、出土した八〜九世紀の木簡や土器の史料から「里刀自」の実態を検討した平川南氏は、「家」とは「ヤケ・イヘ」を意味しており、

「家刀自」とは「家を支配する主婦」であると同時に「祭祀を司祭」する女性であったと指摘している。¹⁹⁾

文学史上、「家刀自」が「家長」と呼ばれる夫とペアとして現れる（義江氏的位置づけでいえば②の段階）のは「日本霊異記」である。欽明天皇の時代、美濃の国を舞台とする「狐を妻」として子を生ましめし縁第二を見てみたい。

二月三月の頃に、設けし年米を春さし時に、其の家室、
稻舂女等に間食を充てむとして碓屋に入りき。

〔上巻〕二七頁

狐の妻が「家室（家刀自）」として、「稻舂女」たちの間食を用意しようとしている。農作業を行う共同体において、「家室（家刀自）」が働き手を束ね、その世話をする役割を担っていることがわかる。

また、「布施せぬと放生するとに依りて、現に善惡の報を得し縁 第十六」にも、聖武天皇の時代、讃岐の国に暮らす夫婦が登場する。

聖武天皇の御代に、讃岐国香川郡坂田の里に、一の富め
る人有りき。夫と妻と同姓にして綾君なりき。

〔中巻〕一六七頁

冒頭部分において、この夫婦は「綾」という同じ氏を持ち「君」という「上代の姓の一つで、地方豪族の尊称」（新編日本古典文学全集頭注）で呼ばれている。「君」という尊称から、「家室（家刀自）」が夫と対等の発言権を持つ人物であることが窺える。この夫婦の隣にはやもめ暮らして身よりのない年よりの男女が暮らしており、毎日欠かさず物乞いにやってきていた。慈悲深い彼女は次のように「家長」に語る。

家室、家長に告げて曰はく、「此の二の者媼、駆ひ使ふに便非ざれども、我、慈悲の故に、家の児の数に入れむ」と言ふ。

〔中巻〕一六八頁

二人の老人は仮に働かせようとしても使えない者たちだけれども、召使の数に入れて食事を与えたい。「家長」は「家室（家刀自）」の意見を聞き入れ、そして家の者全員に向けて、自らの分け前を割いて、彼らに施しをせよ、と告げる。

彼の家口の中に、一の使人有り。主の語に随はずして、
者媼を厭ふ。漸く諸の使人、又厭ひて施さず。家室、
窃に分の飯を擲りて養ふ。

〔中巻〕一六八頁

当初は皆が従ったものの、一人の召使がそれに反感を持つと召使集団は皆施しをやめ、老人たちを厭うようになる。しかし

「家室（家刀自）」だけは傍線部の通りひそかに意思を貫いた。この慈悲の心ゆえに、冥界には彼女が生まれ変わるための「金の宮」が用意されていたという。このように、『日本霊異記』における「家室（家刀自）」は、労務環境全体を見渡し、共同体に不都合や支障が生じた場合には夫に進言し自主的な判断を下している。細やかな気配りや配慮する立場である以上、「まめ」という資質が重要であったことは想像に難くない。

夫の世話をする主婦（義江氏の位置づけでいえば③の段階）としての「家刀自」の様相が窺えるのが、光源氏と近い男性たちが理想の女性について論じ、個々人の体験談についても披瀝する『源氏物語』『帚木』巻の雨夜の品定めである。

（前略）また、まめまめしき筋を立てて、耳はさみがちに、美相なき家刀自の、ひとへにうちとけたる後見ばかりをして、朝夕の出で入りにつけても、公私の人のたたずまひ、よきあしきことの目にも耳にもとまるありさまを、疎き人にわざとうちまねばむやは。近くて見む人の聞きわき思ひ知るべからむに語りもあはせばやと、うちも笑まれ、涙もさしくみ、もしは、あやなきおほやけ腹立たしく、心ひとつに思ひあまることなど多かるを、何にかは聞かせむ

と思へば、うち背かれて、人知れぬ思ひ出で笑ひもせられ、『あはれ』ともうち独りごたるるに、『何ごとぞ』などあはづかにさし仰ぎゐたらむは、いかかは口惜しからぬ。

（「帚木」一一六三～一六四頁）

右は「物定めの博士」（「帚木」一一六九頁）として議論を牽引する左馬頭の発言である。典型的な「家刀自」のふるまいが「まめまめしき筋を立て」と表現されている。点線を付した箇所は具体的な行動である。ただひたすらに世話を焼くことばかり熱中して、夫が職場で感じた面白おかしいこと、腹の立ったことなどを語りかけようとしても、そっけなく返事をすればかりである。左馬頭は、家政の管理能力の高さを評価しつつも、夫や家庭の世話のために髪を耳にかけて奔走する「美相なき家刀自」をいささか嘲笑的に語る。他方でこの前後では、風流ではあるけれども頼りにはならない「家刀自」とは対照的な「あだ」なる女性が話の俎上に乗っている。⁽²⁰⁾最終的に左馬頭の話は、理想的な妻はなかなか見つからないという結論に落ち着くのである。確かな生活力と風流を解する感性とが対比的に捉えられる類例としては、平中から何度も熱心に手紙を送られた「上達部めきたる人のむすめ」が、詠歌も筆跡も稚拙

であったため返事が出来ず、「人の家刀自」となったという『平中物語』「たよれぬ文使い」(第一八段 四八三頁)が挙げられる。ある共同体、特に農作業を生業とするその場合、構成員への細やかな配慮は必須であつただろう。しかしながら平安時代は基本的に京内に田畑を作ることは禁じられており、「家刀自」の役割も邸宅内の家政を管理、統率することへと移つていった。「まめ」という資質は、貴族たちの目には古めかしく田舎臭い、美感に欠けるものとして映つたのではないか。

平安時代も、地方においては集団の管理者としての「刀自」の始原的な役割は維持されており、『伊勢物語』にも田畑を耕す女性たちが登場してくる。「官人」と再婚する以前、〈橘の女〉はどのような暮らしをしていたのだろうか。再会の折に和歌を詠みかけた昔男の態度は、「宮ぶ」つまり宮中風なふるまいそのものである。⁽²²⁾「まめ」という旧来の美德を大切に暮らす〈橘の女〉と、「宮仕へ」に注力し京の価値観を吸収していったであろう昔男との間に亀裂が生じるのは必然であつた。この物語は、人々の暮らしの拠点が移りそれが定着してゆく過程に生じた様々な心のあわいを描く。古今集歌に装えながら紡がれた六十段もそうした文脈の中で解釈すべきであると考ええる。

「羞恥心」でないのだとすれば、なぜ〈橘の女〉は尼になつたのだろうか。京楽真帆子氏によれば平安時代における女性の出家の動機については、「家族の死」による出家、「離婚、別居」さらには男性との性関係の終了を願つて」の出家、「女主人の出家、死亡を契機とする女房の出家」といった傾向がみられるという。⁽²³⁾参考になるのは『源氏物語』「関屋」巻末に描かれる空蟬の出家である。

女君、心憂き宿世ありて、この人にさへ後れて、いかなるさまにはふれまどふべきにかあらんと思ひ嘆きたまふを見るに、命の限りあるものなれば、惜しみとどむべき方もなし、いかでか、この人の御ために残しおく魂もがな、わが子どもの心も知らぬを、とうしろめたう悲しきことに言ひ思へど、心へとめぬものにて、亡せぬ。

しばしこそ、さのたまひしものをなど情づくれど、うはべこそあれ、つらきこと多かり。とあるもかかるも世の道理なれば、身ひとつのうきことにて嘆き明かし暮らす。ただこの河内守のみぞ、昔よりすき心ありてすこし情がりける。「あはれにのたまひおきし、数ならずとも、思し疎までのたまはせよ」など追従し寄りて、いとあさましき心の

見なければ、うき宿世ある身にて、かく生きとまりて、はてはめづらしきことも聞き添ふるかなと人知れず思ひ知りて、人にさなむとも知らせで尼になりにつけり。あの人々、いふかひなしと思ひ嘆く。守もいとつらう、「おのれを厭ひたまふほどに、残りの御齡は多くものしたまふらむ、いかでか過ぐしたまふべき」などぞ。あいなのさかしらやなどぞはべるめる。

〔関屋〕二一三六三―二六五頁

家柄の見合わない結婚をした矢先、うちつけに十七歳の光源氏とたった一度だけの関係を持つてから十二年、それなりの信頼を寄せていた老夫、常陸介が亡くなる。遺してゆく愛妻を案じる常陸介は、子供たちに継母の後見を繰り返し遺言した。しかし懸念は的中し、空蟬を待っていたのは前半傍線部「つらきこと」、すなわち義理の子供たちからの冷遇であった。辛うじて耐えていた最中に、あるうことか義理の息子河内守が彼女の孤立に漬け込んで言い寄ってきたのである。入内を望まれながら実父との死別によって受領の妻におさまった、思えばそれだけで女として不如意な半生だったのに、これ以上侮られ譏りを受けることは是認しがたい。空蟬に残された選択肢は後半傍線

部の通り、誰にも知らせずに尼になることであつた。周囲はその真意に気付くことなく、あまりにあつけないことだと彼女の出家を嘆いた。原因となつた河内守だけがそれが自分への拒絶であることを悟る。こうした事例があればこそ、女の出家が浅はかなものとみなされていたのであろう²⁴⁾。

生き様に関わる選択肢が極めて狭かつた平安時代、自己の名誉にかかわる時、女性たちは躊躇なく俗世を捨てる。再婚相手の「女あるじ」として呼び出され、和歌を詠み掛けられた末に世を捨てる決断をした《橘の女》からも、同様の真意を見出せはしまいか。関連章段とは異なり、六十段は尼となる彼女の心中を描かない。いかようにも類推させる余情、含蓄こそがこの章段の真骨頂なのである。

おわりに

従来の注釈は《橘の女》に対してあまりに懲罰的であり、明らかに読みすぎの感がある²⁵⁾。とりわけ教材として用いる場合には、女性の意思決定は軽薄なもので愚かな結末へとつながるというバイアスを学習者に与えかねない。鎌倉期以来の「伝統」の解釈については一考を要すると言えよう。

『伊勢物語』から千年、この社会における女性の自己決定権は、果たしてどれほど拡張してきたのだろうか。実社会のみならず、SNS上における女性たちの言論環境一つを見て、実のところそれほど更新されていないように思えてならない。そんな社会の構造を稿者自身も、無意識に受け入れ、「わきまえ」、旧習を温存する側に加担してきたのではないかとという忸怩たる思いもある。そのことに気づかされるにつけ、落胆し憂慮することもしばしばである。

語りにくさという指標を通して、学生たちは、長らくジェンダーという視座に蒙昧であった稿者にたくさんの気づきを与えてくれる。そのことに深く敬意を表し未来ある女性たちのために出来ることを尽くしたい、そんな思いで迎える同志社女子大学に奉職して四年目の春である。

※使用テキスト 『万葉集』『風土記』『日本書紀』『日本霊異記』『平中物語』『源氏物語』は新編日本古典文学全集（小学館）、『うつほ物語』は『うつほ物語全』（おうふう）、『続日本紀』は『国史大系』（吉川弘文館）に依る。なお、割注は（へ）を付して記し、私に傍線・傍点、ルビ等を付した。

〔注〕

- (1) 同シンポジウムは、平成二十七年（二〇一五）五月三十日、白百合女子大学で開催された。稿者を含め登壇者は全て女性という画期的な試みであった。その成果は「中古文学」第九六号（平成二十七年（二〇一五）二月）に報告されている。
- (2) 小稿の執筆にあたっては、飯田祐子氏『彼らの物語』（名古屋大学出版会 平成一〇年（一九九八））に学ぶところが大きかった。同書に倣い、ジェンダーという術語を「文化的に構築された性差」として用い、セックス（肉体的、生物学的差異）による分類はジェンダーによって作られ維持されてきたという認識を以て論を進めたい。
- (3) 後藤幸良『『伊勢物語』第六十段の二面的男像——朱買臣像の重層的引用——』（『相模国文』第四五号 平成三〇年（二〇一八）三月）。
- (4) 『伊勢物語』の用例収集にあたっては大野晋・辛嶋稔子編『伊勢物語総索引』（明治書院 昭和四十七年（一九七二））を使用した。
- (5) 『続日本紀』天平三年（七三二）十一月二十八日にも「鎮撫使三位隨身四人、四位二人、並負持弓箭 朝夕祇漿」とあり、やはり「祇承ス」と読み下す。日本古典文学大系『伊勢物語』補注六五も「王朝時代に、地方に在って、勅使が下る時に宿舎や饗応のことなどを司った役人。特に定まった官名

ではなかったらしい」と指摘する。

- (6) 糸井久氏は女あるじであつてもごく親しい人を供応する私的な宴でないかぎり宴席には加わらないことを指摘し、勅使の権力を行使して無理にでも召し出す昔男のありようを論じている。その真意については「愛情が全くなかつたわけでもないし、我が家の「家刀自」という重要な立場にあつたにもかかわらず、自分から放棄して他の男の許に走つた妻に、一目でも会つて恨み言の一つもいいたくなるのは自然な感情ではなからうか」と述べる(『伊勢物語』六十段と『漢書』朱買臣伝「日本文学誌要」第六九卷 平成一六年(二〇〇四)三月)。

- (7) 原國人氏は「もとの妻の前に姿を現わし、酒をつがせ、歌をよむ」ふるまいに昔男の「陰湿」さを見出し、「さつき待つ」の歌を「去つた妻への復讐」と評しており首肯される(「花たちばな」『伊勢物語 成立とその世界』笠間書院 昭和四九年(一九七四) 四七頁)。

- (8) 『律令』に「已に成りたりと雖も、其れ夫外蕃に没落して、子有るは五年、子無きは三年までに帰らず、及び逃亡して、子有るは三年、子無きは二年までに出こずは、並に改嫁聴せ」とある(戸令「二六」 思想大系 一三三頁)。こうした観念は後述の二十四段「梓弓」からもうかがえる。

- (9) 今西祐一郎氏は、この物語には一貫し「宮仕へ」と恋との相

『伊勢物語』六十段「花橘」小論

克があると指摘する(「まめ男」の背景——『伊勢物語』試論——)(『伊勢物語——諸相と新見——』風間書房 平成七年(一九九五) 一三一頁)。また、木下美佳氏も「相手を思う心情が「公務」で身が拘束されることによって報われない状況となる「物語構成を指摘している(「宮仕へ」する昔男——『伊勢物語』における機能——「詞林」第四〇号 平成一八年(二〇〇六) 一〇月)。

- (10) 注(9) 木下論文など。

- (11) 「京を離れた辺地の田舎」(新編日本古典文学全集頭注)。

- (12) 片桐洋一氏は、第二段「西の京」を除いてこの物語の作中人物たちは「どのような規模の住居に誰と住んでいたのかかわらないし、そこでどのような経済生活を送っていたのかも全く記されていない」と指摘する(『伊勢物語とうつは物語』「國文學 解釈と教材の研究」學燈社 第四三卷二号 平成一〇年(一九九八) 二月)。

- (13) 類例としては「おはやけごと」がある。八十三段「小野」では、比叡山のふもと小野の地を急いで退去しようとする「馬の頭なるおきな」が「惟喬の親王」に引き留められるものの、「おはやけごと」があるゆえに「泣く泣く」退去する姿が描かれている(一八六—一八七頁)。

- (14) 注(6)と同じ。

- (15) 注(3)と同じ。

- (16) 日本古典文学大系『日本書紀』下巻補注一六―四(下―五三九頁)。
- (17) 高田里結知識碑(上野多野郡八幡村字山名所在)に「現在父母、現在侍家刀自」(神龜三年(七二六)二月二九日)とある(『寧樂遺文』下巻、東京堂出版、昭和三七年(一九六二)九六八頁)。
- (18) 「刀自」考(『日本古代女性史論』吉川弘文館、平成一九年(二〇〇七)五一頁)。
- (19) 平川南「里刀自小論——いわき市荒田目条里遺跡第二号木簡から——」(『国立歴史民俗博物館研究報告』第六六集、平成八年(一九九六)三月)。
- (20) 左馬頭は「まめ事」と「あだ事」とを比較しながら理想の妻を得る難しさを語っている(『帚木』一―六五頁)。
- (21) 平川氏によると、古代の地方の行政組織である国・郡・里(のちに郷)制下において、責任者「里長」の妻「里刀自」は「里(郷)内の各戸の構成員の動向を的確に把握し、農業経営に隠然たる力を發揮した」という(『古代の郡家と里・郷』「国立歴史民俗博物館研究報告」第一七八集、平成二五年(二〇一三)三月。注(19)の報告と合せて興味深いのは、郡司からの下達文書である郡符木簡の中に、里刀自宛のものが存在することである。九世紀半の木簡であることから、地方社会においては、平安初期に至ってもなお集団を支配する女性が存在していたことが明らかにされている。
- (22) なお、初段「初冠」に用いられる「いちはやきみやび」が昔男を誉め讃える表現ではなかった可能性については、秋山慶氏『源氏物語』から『伊勢物語』へ(注(9)同書一頁)や山本登朗氏「いちはやきみやび」——『伊勢物語』の草子地——(『伊勢物語の生成と展開』笠間書院、平成二九年(二〇一七)六三頁)において指摘されている。
- (23) 「平安時代の女性と出家姿 都市と女性」(『ジェンダーの日本史上——宗教と民俗 身体と性愛——』東京大学出版会、平成六年(一九九四)二七頁)。
- (24) 左馬頭は思わせぶりの「形見」を残して出奔しそのまま尼となった場合、多くの場合本人が浅はかさを後悔することになるとも述べている(『帚木』一―六六―六七頁)。
- (25) 小稿では「思ひ出づ」を「発心する」と解する③『新潮日本古典集成』の説を首肯したい。